



山田弘子句集
春節

社団法人 日本伝統俳句協会叢書

春節

山田弘子

平成七年 『懐』拾遺

文字摺の楷書行書と摘みにけり

虹立てば虹に祈りぬ震災地

暮るるまで浴衣の袖を持って余す

一枚のすだれに隔つ地震の街

水に咲き濡れ色ならず水中花

一匹の目高にもある氏素性

夏山の香を濃くしたる通り雨

ビヤガーデン貧しき唄を聞かせけり

大文字筆勢繋ぎゆく速さ

地震の街覆ひて余るいわし雲

青淵へ誓子句碑へと木の実降る

ポケットの楽しき重さ栗拾ふ

ななかまど夕日の色を加へけり

ふくべ棚声透くころとなりにけり

虫干や素性由々しきものばかり

追ひかけて一人の旅の夜寒かな

此岸より彼岸灯の濃き十三夜

虫鬼灯かなしきまでに全かり

野に迷ふいとども枯れを急ぐかな

年尾忌の手向けごころに摘みしもの

秋風に表札二つ門一つ

秋の蜂水さざめかせ溺れけり

大富士に野山の錦従へり

藪騒に急かされ嵯峨の冬仕度

杉山に凭れ一村冬に入る

向きすこし変へていよいよ枯蟪蛄

蟪蛄の闘志も枯れてをりにけり

帰国してもう日本の子七五三

樹海また樹海の闇の冷まじや

喪の家の物音もなき冬構

膝小さく杞陽夫人や時雨寒

祖谷谿七句

肩布団して南朝の裔とかや

木を剪つて山家の冬を深めけり

綿虫が束の間夕日呼びし谿

祖谷谿に木の葉渦巻く空のあり

落人の谿の長とし炉を辺ひに老ゆ

畳にも目貼し祖谷に住み古りし

着膨れて水恐ろしきかづら橋

庭普請の終り冬芽のつつがなく

買うてすぐ嵌める指輪や年の市

蘭^{蘭塾}学の代へこぼしたる嚏かな

三階の小さなテラス雪うさぎ

平成八年

第七回日本伝統俳句協会賞佳作「高野」より七句

除夜の鐘僧の反り身を月光に

真夜の雪蹴立てて僧の札納

蓮枯れて枯れて鋼となりにけり

雪折れの竹に隠るる墓いくつ

熊笹を揺らしてゐるは冬泉

秀次のまぼろし棲める深雪谷

野鼠の穴踏み外す末黒かな

星荒く夜も雪晴の高野山

甦る記憶今更寒の雨

道すがら見舞ふ人あり福の笹

寒卯己を恃むほかはなし

旅なれや鱒酒に気を許したる

残されし人の春寒思ひけり

哀しみは哀しみとして芒の芽

涅槃図の嘆きに膝をすすめけり

紅白の紐の由々しき雛の菓子

蛇穴を出て整はぬ草の丈

色はまだ水に届かず柳の芽

桐函の文字こそ薄れ雛納

母とせしごとく娘と雛納

お水取果てたる闇のふと弛ぶ

初桜うつくしき宵来つつあり

遠ざかるごとく近づき春の山

こと切れしテレフォンカード四月馬鹿

朧夜の木馬の瞼重くなる

傷心は映さぬ朧夜の鏡

軒低き倉敷格子つばくらめ

遙かともはた昨日とも花の雨

吉野 又兵衛桜

一本の桜のために廻り道

庭下駄の花冷をまづ履きにけり

日裏より日表へ花吹雪かな

旅人の寝息をつつむ花の闇

和田山に年尾句碑建立

ふる里の華やぐ一日百千鳥

加悦年椿

天日を暗め千年椿咲く

振向きしとき牡丹の数増ゆる

梅雨深し山の見えざる山住ひ

蛍の火柱となる刹那あり

阿波に生れ阿波に嫁ぎて夏蚕飼ふ

深淵を抱くひと叢の青芒

白玉に銀座の日暮久しぶり

いくらでも雨を抱けさう葦草

蓮の葉の力学雨をこぼしけり

忌の人の去りて百合の香残りけり

一瀑の躍り出でたる木の間かな

尼寺の音なき暮し半夏生

蕎麦を打つ技を涼しく見せにけり

佐比売野光を置む青芒

夏霧の逆落しくる樹海かな

晚涼の三瓶の星と遊びけり

とどまりて彩を増やしぬ道をしへ

噴水の水をちぎって止まりけり

書齋の灯消して湾の灯秋近し

討死のごとく夫婦の水中り

歯一枚失せて果てたる踊下駄

水平線高々とある砂日傘

秋風に三日遅れて届きし訃

秋風を砦としたるをとこかな

夫より寸借をして秋の暮

霧のバス霧のホテルに人降ろす

柏翠先生と秋夜のロゼワイン

宿を発ち霧にさらはれゆきし人

箒目を小さく寄する萩の塵

露結ぶ密かな音に山泊り

円虹「第一回秋の集い」
こころざし高きに置けば秋晴るる

咲き細りつつ秋薔薇となりゆけり

鶏頭の一茎といふ力活く

石畳より秋の風起りけり

あかときの白光を解く山芒

土器は平らなるかな濁り酒

子は父を越えん鬪志の木の实独楽

布袋草咲いていよいよ水暗し

鉢すこし前倒しなり菊花展

人声が過ぎし山茶花月夜かな

枯残る緑ひとすぢいぼむしり

三角の一角が口枯蠅螂

夜の銀座ネオンを泳ぐ木の葉あり

遠き灯のふと揺らぎたる落葉かな

星空にすつくと芒枯れぬたる

葛湯吹き世に従順な齢なる

楽屋には役者の素顔シクラメン

世話物の孝夫に泣くも十二月

みな胸に点す灯ひとつ年忘

レ

平成九年

投扇や海のごとくに青畳

六甲の峰のどこかが雪しぐれ

避寒とて太平洋をひとつ飛び

悴んで言葉失ひゐるばかり

友待つは春待つに似て改札に

汀子邸

正月を残してありし二階かな

香港三句

霧立つ山よりも人高く住む

ビルの灯は天へ連なり春節祭

爆竹の三万発に厄落とす

谿空の光を泳ぐ辛夷の芽

移されてすでに一景牡丹の芽

鳴き止めば落ちる外なき雲雀かな

赤松の幹の濡れゐる余寒かな

春山を統べるがごとき書斎かな

少年が少年を呼ぶ春の山

筆硯も天眼鏡も雛調度

はり半の畳廊下の余寒かな

虚子の筆若々しきが雛の間に

白こぞり辛夷は闇を眠らせず

夜の雨辛夷の無垢に到りけり

西郷山低くて親し花筵

山の声近々と聞き青き踏む

花は雨宿し雨滴は花宿す

遠き花よりも遙かなものを見る

花は地に還りて天に筭星

よしの路や葎若葉は崖を攀づ

みよし野は歩くに如かず山すみれ

国旗立つ憲法記念日のパン屋

柏餅母の手窪の小さかり

牡丹の襞深うして夜の深き

くちびるのだんだん愉快草の笛

乙訓の風をたのしむ三尺寝

夕立にすこし濡るるも嬉しき日

会はざれば不安な広さ木下闇

初夏のたそがれ色にある仲間

燕の子たちまち競はねばならぬ

螢の息ふくらめば草青し

螢火を見舞ひたき人ありにけり

大江山近々とある夏炉かな

曾爾原の雨を美味しと暮

一茎を横抱きにして雪加鳴く

夜は夜の光を織りて青芒

競馬には負けて昼寝がしたくなる

蝉穴を出るひたすらのいのちかな

螢の月に紛るることのあり

毛虫焼き非情非情つくしけり

席入の祭浴衣も京なれや

宮島管絃祭行四句
祭着の吹かれ掛かれる家舟かな

えぶね

家舟を出て泳ぎ子となりにけり

船渡御のぞめき近づく鳥居かな

回廊は渚のごとし渡御還る

竹煮草きのふの雨の匂ひかな

風晩夏ふる里すでに異郷めく

夏の果出さずじまひの文ひとつ

窓にくる翅音ひそかな夜の秋

赤白となく疎となりぬ夾竹桃

秋めくやワイニングラスを合はすとき

一稿は朝顔の紺萎えぬ間に

新涼やさらりと人をはしもす

降ろされて秋風睨む鬼瓦

山ばかり白雲ばかり旅の秋

岬よりも沖の明るき夜長かな

とんぼうも日本海も夕日中

人悼む筆を起こせし白露かな

山住の音なき音に露しぐれ

まほろばの露は夕べに移りつつ

飛火野の闇一枚の夜寒かな

めなもみ
狝簽といふ字覚えし夜学かな

十六夜や渡航のこころの整ひ来

ロマンチック街道二句

ババリアの太陽なだれ葡萄園

鳥渡る空より高き廃墟かな

城砦に張りつく民家草の花じ

虫時雨山住にして奈落めく

はじめから毒茸と決め一瞥す

玄圃梨くれて山の子もうゐない

本復のまづ草の実にとびつかれ

啄木鳥の音の乾ける一夜庵

暮の秋手に一對の泪壺

緑また欠かせぬ雑木山紅葉

散紅葉しづごころなき古戦場

無患子の湖国の湿り拾ひけり

里祭日役というて中座せる

蜂の巢もまた枯いろに従へる

山かげに高張白き神迎

兄さんがあの世から来て相撲草

日輪を吹き落したり神渡

四足門低く小さく神の留守

釣竿の遠き光も冬はじめ

冬耕や海の入江のかくれ里

燦々玉藻八百号と祝の屏風の花鳥かな

走り根の走り止まざる冬の崖

冬枯の坂は一人で下るべし

文芸の孤独もよけれ漱石忌

気分より先に忘年会の夜が

本音とはときに激しく牡丹鍋

海鼠には半端とてなき好き嫌ひ

風の子の無理を通してしまひけり

倒木を超えし脱兎の光かな

香を忘れをらずくちなし返り咲く

波音を真正面に聖樹の灯

平成十年

一 憂を隠さふべしや初鏡

飛び出して迎へし猫に御慶かな

餅花のながながしきも鏡の間

二階へと移りし遊び日脚伸ぶ

雪女郎赤城泊りの窓叩く

咲きつづくほかなき白さ冬桜

水仙の香に躓いてゐる思考

薄氷のさざなみとなるところかな

ひとり来てひとりの日向梅探る

谿風の鳴る日鳴らぬひ猫柳

神戸市立近代美術館

春灯暗く地球儀天球儀

トランプのクインの横目春炬燵

北極の旅の絵葉書二月尽

灯を入れしよりの雛の愁ひかな

雛さまに聞かせる話にはあらず

落伍せしゴルフレッスン山笑ふ

鳥雲に入りたるあとは風の音

磐座に転げ込んだる春の雷

花こぶし疵をおそれぬ白ほどく

旅人に辛夷は夜の翼張る

初花のなほ咲きふゆる夕日かな

初花に注ぐ夜雨となりにけり

未練とは春の煖炉のやうなもの

不土踏小さく向き合ふ享保雛

トンネルが欠伸してゐる春の山

芦屋川

この花をもて復興の完成す

花の雲へと浮びゆくころかな

人づての消息ばかり春は行く

鎌倉の花の忌日に発ちしとや

茎立や人見知りする島の猫

虚子記念文学館

模型とは近き未来図ライラック

黄桜に兆せし紅の愁ひかな

海原へ出て一蝶の黄の高し

吉野山五句

雨近くなあある一片の落花にも

花終へし幹寂寞とありにけり

雨白く走りし葎若葉かな

みよし野は闇にも草の芳しき

あさもやの動くと見れば蕨採

しばらくは蛙と遊ぶ英語かな

夕風の転がしてゐる雀の子

竹の子のかの子この子と伸び盛り

竹皮を脱ぎ親竹にまぎれんと

大空は大きな未来鯉幟

再会やポピーの風に手をあげて

夏霧山内山彦さん永眠に山びこ返すこともなし

百合一花永久の旅出の汝が頬に

永別の夜の卯の花腐しかな

立直る糸口もなく走り梅雨

衣更へてみても思ひ出ばかりかな

梅雨の灯を寄せて追悼号を編む

夏草や刻をとどめし震災碑

古籐椅子過去形ばかり乗つてをり

穀象に情けをかけず米をとぐ

大盛であり麦飯でありにけり

百足虫打つ女は眉に力見せ

古写真セルの美穂女の長身に

玉葱を刻み昨日を悔いてをり

牛小屋に風来る蠅取りボンかな

万緑の底に生れし仔牛の瞳

赤目四句

布曳の滝は一日の雨を織る

四十八滝の水源地を通過

滝音に倦みしはんざき動き出す

でで虫を雨に返すも旅名残

田を植ゑて昔の景となりにけり

緑蔭に中途半端な時間かな

水無月の雨青々と大窪寺

ゆすらうめ熟れ峡の子はみづみづし

蝉殻を脱ぎて眼光残しけり

扇風送る植女の母であり

松尾大社御田祭二句

植女より解かれてあどけなき日焼

干梅の匂へる宿の達治の詩

よき風とともに茅の輪をくぐりけり

甦る街七月の太陽に

日覆を下ろし深海魚のやうに

ソーダ水未知の視線とぶつかりぬ

拭ひたる汗の目鼻のありどころ

追憶の中に汗の香ありにけり

夜店にも楽屋裏めくところあり

文机の陰に猫ゐる晩夏かな

枝豆や君はどうやら雨男

黒を身に包みしひと日木槿散る

汝が靈を弔ひ踊る阿波の夜

踊りたる夜のみりみる旅荷解く

来世をば垣間見せたる稲光

健啖を褒められてゐる生身魂

鶏頭の赤き拳の中の夜

流星に万物音を断ちにけり

鞆の浦土蔵のすそに秋の潮

よき客のありて耀く庭芒

語りつぐ杞陽ありけり震災忌

許されよ松虫草の種盗るを

佐比売野芒は人を隠さざり

秋風を聞けとや人を偲べとや

祝はれてをりて露けくをりにけり

退屈な猫が一匹秋日和

なめくぢもまた末枯に従ひぬ

朝寒の二人暮しとなりけり

大文字草の未熟な大の字も

奥能登の夕日に縋る案山子かな

木犀の鬱金の雫こぼす雨

河口まで松の手入れは及びたる

ふりこぼす雫の匂ふ松手入

大寺の闇一塊のそぞろ寒

抱え来し包み開けば八口ウイン

いま下りし峰の暗さよ後の月

頂に残る誰彼十三夜

さめざめと銀杏もみぢは雨に散る

冬桜ほろほろ白き坂の街

着膨れてひとつの言葉つつしみぬ

鱈酒にいささか威厳を崩したる

鱈酒の勢ひを借りしことのあり

不景気な話ご法度三の酉

神農の虎の真顔に蹤いてゆく

黙禱といふ回顧あり冬灯

日記買ひかりそめの世に遺すこと

一本の冬木に隠れゐるこころ

星飛べる空へ翼となる枯木

山の音集めて落葉籠となる

顔見世や昔の恋はみな哀し

葛湯溶き混沌とある明日かな

添文のうすももいろの歳暮かな

涸川にももの掃き落す男かな

オラトリオ流れ灯の街聖夜来る
神戸ルミナリエ

騒動の発端牡蠣の鍋にあり

こころの喪解かざるままに日記果つ

何か追ひ何か捜して年暮るる